

G-5 余暇と嗜好品

822. 国営TV放送

かつて日本がそうであったように、いや現在もたいして変りはないが、インドネシアの人々は食費を削ってでも TV を欲しがる。みすぼらしい家屋に燦然と輝く TV の存在は呪術の祭壇のように見える。TV の魔力はインドネシア人を呪縛^{じゅばく}している。

インドネシアの TV 放送開始は 1962 年、ジャカルタで開催のアジア競技大会を機会に国営放送 TVRI が開局した。その際のスローガンが「TVRI menjalan persatuan dan kesatuan (TVRI は国家の統合と統一を押し進める)」であったように娯楽の提供よりはインドネシア語による映像を通しての国造りに主眼があった。

以後、国営 TVRI 独占時代は視聴料は有料であり、TV の大きさによって料金が異なるシステムである。もっとも真面目に払っている人は少なかったらしい。TV のために電気の普及が進められたが、未点灯の農村でも TV の方が先に普及した。自動車のバッテリーを使用して電気を得る方法で電灯の普及以上に TV は普及している。

国営 TV にもコマーシャルがあったが、TV コマーシャルの消費刺激が農村にもたらす影響を懸念して国営 TV ではコマーシャルを一時禁止したが、最近では復活している。

国営 TV 時代のニュースのトップは大統領のセレモニーへの出席などから始まる。すべて予定ニュースであり、放映は登場人物の地位によって編集される。しかしインドネシアの津々浦々にいたる全地域で同じ番組が放映され、絶えず聴視者にインドネシア語が語りかけられ、インドネシアという言葉が繰り返された。TV によってナショナル・アイデンティティは強化されたといえる。

番組の自社制作は 20%程度で音楽、舞踊などであり、その他はアメリカの番組を買い付けていた。日本からのテレビ番組も提供され、1986 年に放送された日本製の『おしん』はインドネシアの 2/3 の人が見たといわれる。

ローカル番組の時間帯はジャワ地域ではクトプラ(後述 829)やワヤン(→905)が放送され、地域文化に根差した番組編成が行われている。

島国であるインドネシアの TV 全国網の展開は遅れた。しかし遅れたために地上に TV 網を張りめぐらす時代をパスして一挙に衛星放送時代に突入することができた。インドネシアが最初から衛星放送(→545)に取り組んだのは島国という事情がある。

衛星放送によって結果的には地上に TV 網という無駄なプロセスを省略できた。“後進メリット”といわれるものである。

1989 年から民間 TV(次項)が加わることにより 90 年代になって全国土に終日放送がおこなわれるようになった。ただし夜7時と9時のニュースは民放もニュースは国営テレビのものを流すのでこの時間帯は全国どのチャンネルも同じニュースである。

823. 民間放送の開局

1962 年以来 27 年間インドネシアのテレビ番組は国営の TVRI(前項)が独占していたが、1989 年8月に民間テレビ RCTI が開局し、1990 年にインドネシア教育テレビ(TPI)、SCTV に続き、1993 年に ANteve、1994 年に IVM(Indosiar)が開局し、わずか 5 年間に民間5局が誕生した。最近では MetroTV、Lativi、TransTV、TV7も加わった。

民間 TV 開局の背景はインドネシアの経済発展の結果、中間階層が形成され彼らが消費生活の自由を求めるようになったからである。舞台裏はスハルト大統領一家が保有していた衛星事業利権のために急がれたのであろう。

放送事業においても出てくるのは例のスハルト大統領一族のファミリー企業(→492)やチュコン企業(→491)の御一行様である。RCTI はビマンタラ・グループ(→529)である。SCTV は大統領の従兄弟のストゥイカトモノが所有している。TPI は TVRI の放送のない時間帯に TVRI の設備を使って放送する民間放送である。ただ乗り放送局は長女の経営である。ANteve のオーナーはバクリー財閥(→528)であり、Indosiar はリム・スイ・リヨン(→523)である。

当初、民間テレビのニュースは TVRI の制作を流すことが義務づけられた。ニュース番組をコントロールすれば情報管理はできるという当局側の腹であった。しかし視聴率を優先する民間TVはニュースという表題は使わずにトークショーの形式で独自の取材によるニュースを流して人気を集めた。

スマトラ島ではマレーシアの TV 放送は遠慮なく侵入してくる、通信衛星による外国からのニュース情報やインターネットによる情報で国民はインドネシアのニュースを知ることができる時代に国内 TV のニュース規制は次第にナンセンスなものとなった。

スハルト大統領の末期には TV ニュースの自由化が加速された。1998 年 5 月のトリサクティ大学事件(→403)の映像はスハルト体制の道義性が問われた。その後の政変の興奮を伝える放送記者の独走をオーナーは制御できなかった。大統領自らの辞任を一族が牛耳るはずの TV 局が競って放送するという皮肉な結果を招いた。

より根源的には TV コマーシャルによる消費文化の浸透は富の配分への問題意識を国民がもつようになり、ファミリー企業の跳梁への怒りを醸す土壌となった。

商業 TV の報道番組は視聴率を上げるために自社製作番組を充実させた。その他はアメリカの番組を買い付けている。日本のアニメの民間放送への進出が著しい。毎日の夕方と日曜午前中の子供時間帯は『ドラエもん』『キャンディ・キャンディ』など日本のアニメのオン・パレードである。例えば“ニンジャ”はインドネシア語化しており、アニメを通しての日本文化の子供への教育的影響が懸念されている。

当初、中国製番組の放映は例え政治的な意味合いはなくても中国文化への忌避から堅く禁止されていたが、ワヒド大統領以降は中国文了解禁策が徐々に進められており、近頃は漢字のコマーシャルも見られるようになった。

824. スポーツ振興

熱帯の国では何もしなくても暑い、体を動かせば汗がでる。スポーツをすれば汗が出る。汗をかくよう仕事

は下々の者がやる、という意識が潜在的にあるためインドネシア人はそれほどスポーツに熱心とは思われない。しかし国民の体位向上のため歴代の政府はスポーツの振興に力が入っておりスポーツ担当国務大臣がいる。政府の叱咤激励で国民も次第にスポーツに関心を持つようになった。

朝早く公園を隊を組んで足並みを揃えて威勢よく行進¹している集団がある。顔ぶれは男女混合、年齢は多岐多様である。額にうっすらと汗が出ている。町内会の有志による団体行進と揃いのTシャツに書いてある。インドネシア人の制服の好きな民族性の集団主義が味噌である。

スポーツは国威発揚の絶好の機会である。インドネシアで開催された最初の国際大会は1962年の第4回アジア競技大会であった。当時のスカルノ大統領は全世界の植民地解放の盟主であるという外交問題をかためて、台湾とイスラエルに案内を出さなかったためオリンピック委員会(IOC)と対立して除名された。

負けずにスカルノ大統領はオリンピックを帝国主義者のクラブと罵^{のの}りしりボイコットを呼び掛け、新興国を集めて1963年に新興勢力競技大会²をインドネシアで開催した。中国(当時はオリンピックに参加していない)を始め51ヶ国が参加したが、第1回だけで終わった。スナヤン競技場(→162)はその際の遺産である。

1964年の東京オリンピックにインドネシアが参加していないのは、国際オリンピック委員会と対決して脱退したためである。

インドネシアのスポーツをインターネットで検索するとシュューバ・ダイビングやサーフィンのマリンスポーツである。これらのスポーツは外国人観光客をインドネシアへ呼び込むためのメニューであり、インドネシア人が行うものではない。観光客に対応するインストラクターは例外的存在である。

そもそもインドネシア人には海でスポーツという発想はない。海は魔物や魑魅魍魎^{ちみもうりょう}の棲家として恐れているからである。ひいては水上競技にも関心がない。水上競技に関心がないのはインドネシアに限らず熱帯国に共通している。ハビビ元大統領(→454)がプールで毎日1200m泳いだのは彼自身が特異なインドネシア人だからである。

オリンピックの陸上競技表彰台は黒人のオンパレードである。これに対して水上競技になると表彰台の黒人を見たことがない。水上競技に黒人が少ないのは経済的な問題と思われていたが、金のかかるテニスやゴルフ、スケートにもスポーツに黒人選手の台頭は目覚ましいことから経済だけの問題ではない。

熱帯の海には鮫や鱻^{さめ}がいる。河には鱉^{かめ}がいる。もっと怖い病原菌の棲家である。インドネシア人を含む熱帯の人は熱帯の水面下は魔界とみなす遺伝体質(DNA)を引き継いでいる、というのが私の仮説である。

825. バドミントンの栄光

1992年8月4日、バルセロナのオリンピックではバドミントンの女子シングルの決勝戦が行われ、インドネシアの当時21歳のスシ・スサンティ(Susi Susanti)が金メダルを得た。続いて男子シングルの決勝戦ではインドネシアのアラン・ブディクスマ(Alan Budikusuma)が同じインドネシアのアルディ・ウィラナンタを破った。インドネシアは金2個、銀2個、銅1個のメダルを獲得した。

¹インドネシア人は歩くことを嫌がり、少しの距離でも乗り物に乗ろうとする。政府の呼びかけで行進が最も身近なスポーツとして受け入れるようになった。いかにもスポーツらしくするため制服を着て隊列を組んで足並みを揃えて威勢よく歩く。

²1963年11月の新興勢力競技大会=GANEF(Games of the New Emerging Forces)は先進国からは無視されたが、ジャカルタでは盛り上がった。日本からも9種目、73名の選手が参加した。

バドミントンにそれほど熱心でもない日本の新聞でも大きく取り上げられたのは、男女で優勝した二人が婚約者であることが話題となった。

この快挙をインドネシアの新聞は【バルセロナに紅白旗はためく！】【スシ、アラン、インドネシアに栄光をもたらす！】と一面に特大の活字で伝えたのはインドネシアのオリンピックの歴史における最初の紅白旗(→296)だからである。東南アジアの国が始めて獲得した金メダルでもある。喜んだインドネシアでは10億ルピア(1992年当時55百万円)の報奨金で豪邸が贈られた。二人は1999年に歓呼の声に送られて引退した。

さてここで特記したいのはスシ・スサンティ、アラン・ブディクスマの両人とも中国系インドネシア人(華人)であることである。一般に中国系インドネシア人の置かれている状況は複雑である。しかしオリンピック優勝という偉業に対しては中国系であってもインドネシア人はこぞって手放しの歓喜である。経済の分野でありえないことが、スポーツの分野ではいとも容易に実現できる。

バドミントンのライバルは中国である。1994年東京で行われたバドミントン・ジャパン・オープンの対決でも女子決勝はインドネシアと中国の対決になり、スシ・スサンティが中国を下した。中国の中国人に対して中国系のインドネシア人は色も黒く紛うことなくインドネシア人に見えたのが印象的である。

1996年のアトランタのオリンピックでもバドミントンの男子ダブルスで金、女子シングルで銀、銅、スシ・スサンティは銅である。2000年のシドニーのオリンピックでも金1、銀3、銅2を得た。この内、金1、銀2はバドミントンである。

バドミントンはインドネシアの国民的スポーツであり、学校でも盛んである。特に東部ジャワでは熱心である。狭苦しいカンブン(→728)にもバドミントン・コートがある。バドミントン・コートは必要最小限の公共施設である。バドミントンがインドネシアで人気のある理由はテニス・コートよりも狭い面積であるため場所をとらないこと、即ち安上がりだからであろう。

インドネシアがバドミントンに強いのは底辺が広いことに加えて、もう一つの理由は暑さ対応力らしい。バドミントンの正式な試合では空調を使用しないらしい。何故ならわずかな風でもシャトル・コックは影響を受けるからである。従ってバドミントン選手の敵は暑さである。インドネシアの選手が強いのは暑さに強いからだということである。

826. 「ハロー・ハロー・バンドウン」

日本国歌『君が代』の雅楽に基づく超短調のメロディは厳粛にならざるをえない。先入観なく君が代を聞いた外国人には葬送歌と思うのも無理はない。国歌には厳粛なものもいいが、勇壮なものであってもよい。あえていうならば『軍艦マーチ』が第二国歌のように使用されるのもそれなりの必然性である。

インドネシアの国歌は『インドネシア・ラヤ(→297)』である。そしてもう一つの第二国歌³が『ハローハローバンドウン(Hallo Hallo Bandung)』である。国歌インドネシア・ラヤは独立前の青年の誓い(→292)の中で生まれた厳粛な雰囲気のある歌である。『ハロー・ハロー・バンドウン』は独立戦争の中で生まれたクロンチョン(→984)であ

³インドネシアには「Indonesia Pusaka(インドネシア・プサカ)」「Garuda Pancasila ガルーダ・パンチャシラ」「Hari Merdeka(独立の日)」「Dari Sabang Sampai Merauke(サバンからメラウケまで)」「Maju Tak Gentar(震えずに進め)」の愛国歌があり、独立記念日に国歌とともに歌われる。

る。

バンドゥン火の海事件(→322)でインドネシア軍はバンドゥンに火を放ち退却せざるをえなかった。その時再びバンドゥンに戻る誓いに託してイスマイル・マルズキは『ハロー・ハロー・バンドゥン』を作詞作曲した。

我らのバンドゥン我らは勝利を待つ

我らのバンドゥン焼かれた街よ

平和の歌取り戻す日まで

つのる思いを胸に抱き我らは戦う(出典 LAGULAGUINDONESIA)

日本語の翻訳歌詞からみる限り、バンドゥンに別れを告げる^{あいせき}哀惜を感じる。しかし一度メロディが演奏されるや実は力強い雄たけびである。『ハロー・ハロー・バンドゥン』が^{げんどちようらい}捲土重来を誓う軍歌であることに気がつく。歌詞のとおりインドネシア軍はバンドゥンからオランダを追い払い独立を勝ち取った。

インドネシア人がだらしなく集まっている時、『ハロー・ハロー・バンドゥン』が聞こえてくると全員、歌に加わり規律がよみがえる。最近、ASEAN などの国際スポーツ試合でインドネシアと対戦する相手国選手は『ハロー・ハロー・バンドゥン』を恐れるという。それは次のような手痛い体験が伝えられているからである。

試合ではインドネシアが劣勢のまま最終段階を迎えた。その時スタンドの観客席から応援のインドネシア人が起立して『ハロー・ハロー・バンドゥン』がまき起こる。するとどうだろうインドネシアの選手は生き返ったようになり、たちまち逆転してインドネシアの勝利となった、という伝説がある。

インドネシア人に運動会の応援を企画させたら日頃の業務の遂行状況からは想像もできない素晴らしいものである。彼らの優れた芸術的センスはエンターテイナー精神にも発揮される。

ちなみにインドネシア人にマスゲームを教えても無駄であろう。整然としたマスゲームはナチスとか北朝鮮、あるいは日本の某宗教団体等ろくでもない体制の連中がやりたがる。ああいう出し物は見ている気持ちが悪く、やっている人間の顔はクローン人間の表情である。⇒986.イスマイル・マルズキ

827. シラット/伝統武芸

「シラット(silat)」というのはマレーの伝統的な武術、護身術である。精神の集中というようものを重視する点では中国の太極拳や日本の柔道、空手、小林寺拳法に共通するところがある。シラットは黒の衣装を着ることによって神秘的な雰囲気包まれる。正式名は「プンチャック・シラット(Puncak silat＝シラットの至高)」といわれる。

そもそもは格闘の武術が起源であるが、日本の柔術が柔道となり、剣術が剣道となったように精神的なものが求められるようになる。プンチャック・シラットにおいて武技の動作には次の誓いを求められる。

忍耐して譲る、弱い者を支援する、公正を守る、交際時の礼儀を正しくする

教師を尊敬する、父母に奉仕する、規則に従う、真剣に宗教の教えに従う

いばらない、自分の能力を誇示しない、好きなようにしない、個人の尊厳を重んじる

シラットは洗練されてくると演舞として形式化されてくる。相手を倒すことより技の誇示に重きがおかれる。従って必殺のような技はない。あくまで“気”による自己鍛練である。結果として護身術になる。

最近では結婚式などの祝いの席で鐘や太鼓、あるいはガムラン(→910)の伴奏でシラットが余興として演じられる。このあたりは日本の剣舞や居合い抜きと同じようである。カルチャーとしてのシラットはスニ(suni)とい

われる。

オララガ(olahraga)といわれる格闘技としての伝統も維持されているが、禁じ手などのルールが決められている。クリス(→702)を使用する流派もある。

シラットで知られるのはマラッカ王国の英雄である「ハン・トゥア(Hang Tuah)」である。ハン・トゥアとその仲間
は人里離れた山中で武芸を磨いた。神秘主義の師について奥義をきわめ免許皆伝を得て下界に戻った彼らに武芸で対抗できる者はなかった。

外国からの使者の連れてきた武芸の達人の挑戦にも上覧試合で相手を打ち破りマラッカ王国の勇名を高らかにしめた。ハン・トゥア物語のハイライトは国王への忠誠を貫くための盟友「ハン・ジュバット(Hang Jebat)」との決戦に挑むことを余儀なくされた。シラットの達人である両者の数時間にも及ぶ死闘は映画や芝居でも不可欠のアクション・シーンである。ちなみにハン・トゥアはブギス人(→615)と伝えられている。

各地にシラットの流派があり、マレーシアでも盛んであるというよりはマレーシアが本家かもしれない。シラットのインターネットを見ると世界各地に同好会がある。日本にも同好会が発足している。特にオランダに多いのはインドネシアとの絆の深さであろう。世界選手権もあるらしい。ジュウドーはポピュラーに成りすぎただけに、異国趣味からシラットが流行するかもしれない。ただレイスラム流の礼拝という関門がある。

スルタン王家(→121)にマパティ・プティという秘伝の伝統武道がある。精神を統一すれば目隠ししても字が見えるらしい。大統領の護衛官はマパティ・プティ修業経験者といわれる。

828. セパタクロー/伝統球技

「セパタクロー(Sepak takraw)」は手以外の所を使ってボールを地上に落とさずにネット越しに相手側の陣営にボールを蹴り返す競技である。セパはマレー語の「蹴る」、タクロはタイ語の「ボール」の合成語であるように東南アジアの競技である。

試合の要領は“手を使わない”バレーボールといえるが、サッカーの空中戦でもある。アタックもレシーブも頭上より高い位置で足を使うので頻発する宙返りはアクロバットを見ているようで迫力のあるスポーツである。

セパタクローの原型はボールを地上に落とさないように足で打ち上げる競技としてマラッカ王国(→032)時代から行われていた「セパ・ラガ(sepakraga)」である。セパ・ラガは京都の御所や神社で行われる蹴鞠けまりと似た競技らしい。対抗戦でモルッカのスルタンが200回蹴り続けて優勝したという記録がある。

マラッカ王国の文化として東南アジア各地に広まった。各国でセパタクローが続けられていたので本家争いもあったが、1956年に競技ルールの統一化が図られた。

ボールの円周は38~43cm、重さ160~180g、ボールは本来のラタン(→558)製に代り合成樹脂製のもので代用されている。コートコートの広さはバドミントンと同じ、ネットの高さ1.52~1.55mである。競技方法は3人と3人、3回以内に相手側に返す。一人で3回が可能であるところがバレーボールと異なる。足でなくても手と腕以外ならどこで受けてもよい。アタックの球速は140km/hになるらしい。

1988年のソウルで開催されたオリンピックで足を使うバレーボールとして紹介され一躍有名になり、欧米各国に広まった。1998年のバンコックのアジア大会では正式競技種目になった。近いうちにオリンピックの正式競技種目に採用されるようである。

競技で国際的にインドネシアが優位なスポーツはバドミントン(前述)であり、国民的スポーツになっている。

しかし子供には男子にはサッカー、女子にはバレーボールも人気がある。空き地でインドネシアの子供が数人で輪になって器用にボールを蹴りあげて遊んでいる。インドネシア人がサッカーに夢中になるのはセパ・ラガに由来するのであってオランダ人趣味の置き土産ではない。

東インドネシアの村の中央の一番良い場所にサッカー場があることが多いのはアニミズムの祭典の場を宣教師が嫌ってサッカー場にしたからだという説がある。

サッカーはインドネシアでも盛んであり最も人気あるスポーツで大きな都市はプロのチームがある。東リーグと西リーグに分かれている。今のところは国際試合にも出場しているが、さしたる結果はでていない。

しかしフリーガンの顔の装飾などの派手な出で立ちはヨーロッパそこのけである。都市対抗の決勝戦ともなるとフリーガンが暴走する。もともとアモック(→575)の傾向のある民族だけにフリーガンの扇動で民族問題の火種にもなりかねない。インドネシアのフリーガンの乱暴狼藉では世界水準を上回る悪さである。

829. クトプラ/大衆演芸

インドネシアの演劇はワヤン(→904)の系統を引く伝統文化としてワヤン・オラン(→907)がある。一方、新しい演劇としてのレンドラ(→992)の演劇は芸術的水準が高く国際的評価をえている。これら演劇界の裾野には庶民の演劇がある。

ジャワの大衆演劇である「クトプラ(Kethoprak)」は歌、踊り、シラット(前々項)、アクロバットを取り入れた総合芸能である。言葉は現代ジャワ語であり、伴奏音楽にガムラン(→910)が奏でられる土着芸能である。祭りや儀式に招かれて上演される。

舞台は王宮で王侯貴族が登場する。しかし主役は兵士であり道化である。こっけいな仕草や台詞で観衆を沸かせる。ワヤンの哲学的台詞せりふに対してクトプラの台詞は駄洒落が多く、卑猥な台詞ひわいに観客は大喜びである。

ワヤンはハルス(→634)であり、クトプラはカサルそのものである。しかしジャワの農村ではクトプラの役者はワヤンのダラン(→874)であることが多い。末端ではクトプラとワヤンの境界はラップしている。

クトプラは19世紀末から20世紀にかけて農村の娯楽として誕生した。クトプラの起源は「ルスン(Lesung)」という米搗きの臼をたたく余興といわれる。ガムランを加えワヤンをくだけたストーリーにして興行に発展したといわれる。ルスンは収穫の象徴である。収穫の喜びを表す音がルスンの音であり、クトプラの音楽の起源をルスンに求めている。クトプラの成立の過程には知識人も参加している。

独立後、ジャワの庶民に人気があったため政党の文化活動として宣伝活動に利用し大衆動員を行った。大衆性と反権力性から共産党と結びつきやすかった。

クトプラはバリのガンブー(→916)、アルジャ、東ジャワのルドルック(ludruk)とともにインドネシアの演劇界を支える地方文化として逞しく生きている。バタビアのブタウイ人(→690)に人気があるレノン(lenong)も同じ線上の演劇であろう。

日本軍はジャワ占領に際し宣伝班(→353)を同行し文化政策を実施した。この中では演劇が最も即効性があることで大衆演劇「サンディワラ(sandiwara)」を利用し、戦争協力を織りこんで大衆を誘導した。クロンチョン(→984)のブンガワン・ソロ(→985)もサンディワラの出し物の一つであった。

クトプラのジャワ語に対してサンディワラはインドネシア語を使用しており、汎インドネシア性の娯楽である。

サンディワラは日本の敗戦とともに下火になったが、インドネシアの TV を見ていると芝居、音楽、舞踊を組み合わせたバラエティショーがある。サンディワラは名前を変えただけで生きており、レンドラなどの近代演劇にもつながる。

一方、ジャワ語のクトプラはあくまでジャワ人の娯楽である。TV などのマスメディアの発達によりクトプラの人気は下降気味といわれる。吉本新喜劇が関西弁を下品な標準語に変えて生き延びているようにクトプラも形を変えて全インドネシア人に受け入れられるような娯楽になるだろうか。

830. ダンドゥット



ロマ・イラマ

インドネシアの歌謡で最も人気の高い「ダンドゥット(dangdut)」は 70 年代の生まれの音楽で数十年の歴史しかない。創始者の「ロマ・イラマ(Rhoma Irama)」は 1947 年、西部ジャワのタシクマラヤの生まれで、軍人の父の医者にしようという意に反して音楽に転向した。

いくつかのバンドで活躍し、1963 年に自分のバンドを持った。当時はスカルノ大統領の西欧音楽嫌いの影響でオルケス・ムラユと名乗るマレー風の音楽が人気をえていた。9 月 30 日事件で西欧音楽が解禁になり、当時、米国で人気のあったロックンロールがインドネシアへなだれ込んだ。

ロマ・イラマはオルケス・ムラユにロックを結び付け、さらにインドやアラビアのリズムの要素を付け加わえたものである。楽器はエレキ・ギター、キーボードの電気楽器、ベース、ドラムス、サクセスにインドネシア古来の伝統楽器であるスリン(竹笛)、クンダン(太鼓)も加わり、民族色の濃いものになっている。ダンドゥットの命名はクンダン作り出すビートの擬音「ダングドゥ」である。

クロンチョン(→984)はインドネシアが独立したときに国民音楽として持ち上げられた。格式の高いクロンチョンに対してダンドゥットは歌詞もナンセンスであり、庶民の音楽として一段と下に格付けされインテリは下品として嫌った。ダンドゥットの音楽家でさえ最初は「ダングドゥ」という即物的な言葉を嫌った。

1975 年の『ブガダーン』が大ヒットし、その後、ロマ・イラマが作詞作曲した 250 以上の曲には『ルピア』『人権の歌』『選挙の歌』など社会性の強い歌がある。『ルピア』の歌は「世の中はすべて金次第・・・」と世相を皮肉った。その他は開発を呪い億万長者への怨嗟、反戦の歌もある。スハルト時代はロマ・イラマの歌の多くは放送放映が禁止された。

彼はメッカ巡礼でハジの称号をえており、歌詞には物質主義への戒め、アラーへの帰依、イスラム的な教訓など布教の意図が見られる。

当初は都市下層階級向けの反体制文化の音楽として出発したダンドゥットであるが、ロマ・イラマ以外にエルフィ・スカエシ(次項)などの人気歌手が続出した。やがて上流層の遊び場のディスコで演奏され、クロンチョン歌手も地方公演ではダンドゥットを歌うようになった。インドネシア音楽のレコードやテープの売上の 90%はダンドゥットといわれるほど音楽分野に目覚しい進出をとげた。

ダンドゥットは都市中間層の勃興に対応する国民的共感を伴う国民文化として位置付けられつつある。インドネシア唯一の独創文化という評価もある。異国風のリズムは外国の音楽ファンの人気を集めている。日本でも公演があると大勢のファンが押しかけるらしい。年齢制限あるわけではないが私は行ったことはない。

最近のインドネシアでは「ポチョポチョ(Poco-Poco)」というダンスが流行しているらしい。それほど難しいのでリズムに合わせて皆が参加できる。

831. 大衆音楽の歌手

“ダンドウットの王”と言われるロマ・イラマ(前項)の演奏は絶叫でもって聴衆に語りかけながらコミュニケーションをはかるものである。若者が押し掛けて熱狂することから彼のコンサートは騒動の代名詞であった。彼は映画俳優としてもスーパースターである。

当初の選挙では野党である開発統一党の運動に参加し、スハルト体制下では大衆動員力が当局に警戒された。彼はスハルト体制批判を行ったが謹厳なイスラム教徒であった。そこへ「イワン・ファルス(IwanFals)」



イワン・ファルス

というもっとすごい反体制歌手が現れた。1961 年生まれ、ボサボサの長髪、口髭、擦り切れたジーンズがトレードマークである。

イワン・ファルスは 1989 年からスワミ(SWAMI)のロックバンドを組んでいる。そこで彼の歌った空前のヒット曲は『ベントー (Bento ジャワ東部のスラングでバカヤローの意味)』である。「スハルトを憎む」というシンカタン(→964)が込められているらしい。

俺の名前はベントー

家、不動産、クルマはたくさん財産あふれるほど

人はオレを取締役社長と呼ぶ

演劇家レンドラ(→992)と組み、イワン・ファルスが歌い、レンドラの詩の朗読するスナヤン競技場(→162)での興行に集まる多くの若者の圧倒的人気の前にスハルト体制も座視せざるをえなかった。

女性歌手では 1951 年生まれの「エルフィ・スカエシ(Elvy Sukaesih)」がダンドウットの女王といわれる。10



Elvy Sukaesih

歳からラジオで歌ったアイドル歌手である。エルフィの妖艶な歌声こそインドネシア・ダンドウットの底なし魅力だ！、というファンは日本にも多い。代表曲は『シン・ファルハット』である。

ダンドウットを代表するロマ・イラマがイスラム的色彩を強めるのに対してエルフィ・スカエシはインドネシア土着的である。両者の中間路線としてティティエク・プспа、エビート・G・アデなどの歌手が有名である。

最近話題の人気歌手は東ジャワ出身の 2000 年に登場した「イヌル・ダラティスタ(Inul Daratista)」という女性歌手である。イヌルは 2003 年に 24 歳の妙齢である。歌いながらゴヤン(Goyang)といわれる激しい腰振りダンスが人気を集めた。

彼女のドリル・ゴヤンの意味は腰の動きが錐の使用からの類推であろう。コンサートは若い男性で熱狂的であり、下半身の動きが扇情的である。山本リンダの「ウララーウラウララ…」の衝撃と似ている。



イヌル・ダラティスタ

イスラム関係者はセクシーであるとして公演禁止を求めた。TV の放映では腰から下にボカシが入っている。ダンドゥット会の会長として業界の長老的存在になったロマ・イラマがダンドゥットを^{おとし}貶めるものだとイスラムの腰振りダンスに激怒した。ロマ・イラマの断罪に反論が輩出しインドネシアのマスコミを賑わしている。しかしゴヤンの刺激を受けて列島各地ではさらにエスカレートしている模様である。

832. 闘鶏の熱中度

東南アジア各国の例にもれず、インドネシア各地でも闘鶏は行われている。中でも闘鶏に熱心なのはバリ人である。バリ寺院の境内あるいは村の中心には必ず闘鶏のための区画、相撲の土俵よりは一回り小さな区画がある。

鶏の闘争心を刺激するため、相手とすり合わせてから闘鶏場に放つ。足に鋭い刃物がつけられており傷つき死ぬまで続けられる。飛び上がり空中で体当たりすると羽毛が飛び散る。戦闘は 10 分ほど続くが、瞬間的に勝負が決まることもある。

勝った鶏は負けて倒れた鶏を突つき高らかに勝利宣言を行う。両方も傷つくこともある。この場合は早く死んだ方が負である。判定の難しい場合に備えて詳細なルールがある。平和主義の鶏もいる。この場合は狭い籠の中でけしかけて勝負をつける。それでも闘わない鶏は生きる価値がないとして殺される。

互角と認めた相手を探し、面通しで早くも鶏は戦闘意欲が高められる。双方の持ち主の合意の上で相手が決まる。足につける鋭利な刃物は足に硬く縛り付けられる。小説の記憶では刃物の角度や縛り型に手加減の余地があるらしい。一方、観客の間で賭けが募られる。賭けが両者に均分でない場合は比率がセットされてから戦闘開始である。

負けた鶏はその場で毛をむしられ、勝者が持って帰り食べる。勝者も瀕死の重傷で死ぬことがあるが、この場合は表敬のため食べられないらしい。

闘鶏の起源は鶏は神への捧げ物であり、血を流すことは大地の清めの儀式である。鶏を生贄^{いけにえ}として殺す習慣はインドネシア全土で見られる。バリでは寺院の境内や側で行われることで儀式の名残を残している。

バリ人が闘鶏に熱中するのは賭博^{とぼく}のためである。闘鶏にのめり込めば田畑や家屋の資産を失うことも意にかけないという弊害のため政府は決められた祭日以外の闘鶏を禁止した。外国からの観光客に残酷な見せ物をしないということになっているが、実は民衆が熱中して仕事をしなくなるのを予防しているらしい。

しかし政府のお触れくらいでバリ人が闘鶏を止めるわけがない。祭日以外にも密かに行われていることは公然の秘密である。これほど男が夢中になる鶏に女は無関心であることが不思議である。双系社会(→568)では趣味も双系なのであろうか。

ちなみに今東光の『河内風土記』によれば、大阪の南河内で 30 年前頃まで行われていた闘鶏は軍鶏^{しやも}という小型の鶏である。むしろで囲んだ直径 1.5m の狭い所で2羽はつつきあう。刃物はつけない。先に悲鳴をあげた方が負である。

闘鶏はバリ島に限らずインドネシア各地の伝統娯楽であったが、賭博禁止のイスラム教の布教に伴い、廃れてきた。しかしインドネシア人は賭け事がすきである。男は暇があればトランプ競技に余念がない。最近は大人の^{こま}独楽遊びが流行っているが、賭け事なしでやっているはずがないと思う。

⇒073.天からの使者

833. コピ時間

日系企業の日本人管理職が女性事務員に「コピー」と命じてコーヒーが出てきた話はあちこちで聞く。インドネシア語の「コピ(kopi)」はコーヒーのことである。を「copi tanpa gula(砂糖なしのコーヒー)」と命じたら砂糖を山盛りのコーヒーがでてきた。日本人の発音は彼らには「copi tambah gula(砂糖たくさんさんのコーヒー)」と聞こえるらしい。

エチオピアの原産のコーヒーはアラビア人の習慣として世界に知られるようになった。インドネシアへコーヒーをもたらしたのはアラビア人であり、栽培方法をもたらしたのはオランダ人である。⁴コーヒーはインドネシア各地で生産される農作物であるとともに、日常生活において欠かせない飲み物である。

コピのワルン(→858)は街のあちこちにあり、そこには男どもが集まって時間つぶしをしている。生活の潤いの時間である。寒い時は生姜入り^{しょうが}コーヒーで暖まる。焼いたとうもろこしを混ぜ合わせる飲み方もある。

インドネシアのコーヒーは微粉末であり、入れ方は紙で濾さずに、多い目の砂糖と一緒にかき混ぜてしばらく静置してから上澄みだけを飲む。あわてるとコーヒーの粉が口に入り、口の中がザラザラとする。インドネシア式コーヒーの初体験を「砂利が入ったコーヒー色つき臭いつき砂糖水」と形容した人がある。この人も一年たつと粉っぽいのがインドネシアコーヒーの味わいだと思うようになったそうである。ホット・コーヒーといえどガラスのコップに注ぐのは沈降具合を見るためであろう。

インドネシア人は砂糖なしのコーヒーを好まない。ジャワ人の家を訪問して苦いコーヒーが出された場合は歓迎されていない証拠である。男が娘の家へ結婚の申し込みに行った。返事は砂糖の有無である。砂糖なしコーヒーは拒否を伝える信号と読まなければならない。インドネシアの NO の信号(→582)の解読は文化である。

ホテルなどのメニューでは NESCAFE という粉の入らないコーヒーもある。いわゆるインスタント・コーヒーのことで、しかも値段は本物のコーヒーより高い。インスタントは加工賃だけ余分のコストがかかっているから高いのが当たり前だそうだ。



紅茶はコーヒーのように“くつろぎ”のスタイルとしては普及していないが、飲料水として定着している。ビン詰めの【テ・ボトル(The Botol)】は今やココロ並みの人気商品となっている。たっぷりと砂糖の入った甘い紅茶である。インドネシア人の好きなジャスミン(→053)の香りが人気の秘密であろう。

テ・ボトルは創業者のソスロジョジョ(Sosrodjojo)が 1940 年に中部ジャワで始めた家内工業が地元で成功をおさめたものである。その息子スティプト(Soetjpto)は 1965 年にジャカルタへ進出して「Hari-hari teh Sosro」の CM でテ・ボトルは全国区のブランドになった。利権と関係のないプリブミ(→474)が自力で事業に成功した珍しい例である。

⇒559. コーヒーと茶

⁴ <編者註>インドネシアで圧倒的に多いのは Robsta 種でジャワとスマトラ南部が主産地。Arabica 種はアチェからイリアンまでの高地で栽培している。各地で味が異なる。

834. キンマの接待

インドネシアを中心にインドから南太平洋にかけての広い地域にピナン椰子(→045)といわれる^{びんろうじゅ}檳榔樹の実をキンマ(シリともいう)と一緒に噛む習慣がある。キンマは胡椒科に属するピペル・ベーターという植物の葉で刺激性の味と特異な芳香がある。



キンマの葉にピナンの実をつぶしたものを包み、貝殻を焼いて作る石灰をまぶす。好みに応じて少量のガンビール、カルダモン、かみ煙草などを加えることがある。それを口の中で噛むとキンマが含むアルカロイド(タンニン)によって麻酔作用があり陶然と酔った気分なる。キンマを噛めば気分がさわやかになるが多すぎると辛い。石灰の作用で赤くなる。

一度その味を知ると中毒になるほど魅力のあるものらしく、やがて常用シタバコのように癖になる。清涼剤として好まれる嗜好品であり、健康にもよいといわれる。唾液と胃液の分泌をよくして食欲を増進する、口臭を除きタンニンによって歯茎を引き締める、寄生虫の予防にもなる。このような意味では熱帯アジア住民の生活の知恵であり、熱帯アジアのチューインガムである。

問題は檳榔樹の実による赤色の色素が強いことである。このためキンマを好む人の口の中が染まることである。オハグロのように歯だけではなく、口の中全体が赤黒く染まる。キンマを噛むと刺激性のためつばが出る。

従ってつばを吐き回るがそのつばが血のように見える。赤黒い口の印象といい、唾^{つば}の赤いことといい、そこからヨーロッパ人は“食人”を連想した。オランダ人の間でも愛用されが、白人は次第にやめた。特にラッフルズ夫人(→338)が嫌がったという。

非文明的ということでインドネシア人においても上流階級から次第にキンマの習慣はすたり、最近では都会ではほとんど見かけることがなくなり、老人の嗜好品として残っているにすぎない。東ヌサテングラの離島や僻地の旅行記によれば今でもキンマの接待があるらしい。

バリ島では化粧の口紅として今日も使用されている。どういことか台湾でキンマが復活している。赤い唾を吐きちらすため台湾の街は汚い。

民俗史におけるキンマの役割は嗜好品であることにとどまらずコミュニケーションの小道具であった。客へのもてなしにキンマを差し出された。次第にキンマの風習は社会的な意味を持つ行為となり、さらに洗練されて儀礼として様式化され、日本の《茶文化》に相当する《キンマ文化》を産み出すまでに至った。

宮廷では贅^{ぜい}をつくした“キンマ道具”が作られた。多くは宝石や象牙をちりばめた精巧な銀細工である。粹をこらした木彫りもある。手で持てるくらいのケースに収容される携帯用もある。今日では東南アジアの博物館に工芸品コレクションとして展示されており、かなりのスペースをしめている。日本の茶道具の香合に用いられる“きんま塗り”漆器の製法の起源は東南アジアのキンマ道具に由来する。

835. タバコは健在

信号で停車中の車の運転手に煙草売りの少年が近づく。煙草は箱から出してばら売りである。1本、2本と

買う様が見える。煙草を箱単位で買う余裕がない人の腕は、煙草より食べ物を買った方がよいと思うほど痩せている。

今日インドネシア人全体を観察していると煙草をすう人は非常に多いことに気がつく。貧乏人は食事をしなくても煙草はすう。煙草を吸わない人は何か健康上の特別の事情かと思うくらいである。

一般論としていけば所得が増えて裕福になると煙草の消費量は減る。例えば日本でも高度経済成長の始まる昭和30年代の新入社員当時の毎朝の灰皿片付けの経験から、日本の男性の3/4以上は煙草を吸っていたように記憶している。日本男性の今日の喫煙者と非喫煙者の比率は逆転している。

このように喫煙が所得水準と負の相関関係にあることは食料供給との関係でなからうか。貧しくて食べ物が十分でない時に飢えを誤魔化するのが煙草である。煙草は食欲を抑制する。したがって食事を十分に供給できないと煙草の消費量は多くなる。このようにいけば高額所得者の喫煙家から不快感を招くだろうが、一般論には例外があり私の周りの喫煙者で食糧に困っている人はいない、むしろ高額な税金を払うことを意に介しない裕福な人ばかりであることを蛇足ながら付記しておく。最近では女性の喫煙が気になるが、美容のためらしいので上記考察の埒外である。

喫煙者の多いインドネシアでは煙草の消費量は非常に多い。国内で年間1840億本売れ、総売上高は600億ドルという。したがってインドネシアの煙草会社はグダン・ガラム社(→524)のような超有力企業である。

さて欧米でいじめられる一方の煙草会社がインドネシアの溢れるばかりの喫煙者を見てマーケットを考えないはずがない。市内にもカウボーイ・ハットのアメリカ銘柄の大きな看板が目につく。しかし欧米の煙草会社はインドネシアではさしたる成果は得られないようだ。その理由は輸入ブランドが割高であるというコストばかりではない。最大のインドネシア人の煙草の志向がクレテック(次項)にあるからである。

インドネシアでかくも煙草が好まれる理由はキンマ(前項)の風習が煙草に代替されたという経緯でないだろうか。辺境に住む未開の部族を訪問する紀行文を読むと相手に煙草を差し出すことからコトが始まる。煙草を受け取ってくれると緊張は溶け、友好と平和がもたらされる。クレテックであればその芳香は良い雰囲気を作り出す。

都会の日常においても見知らぬ人同士が話しかける前には煙草を勧める。煙草は吸うためだけでなく、日常の社会儀礼の小道具という一面もある。私の記憶でも煙草の火を借りることから見知らぬ人に声をかけたり、かけられたりした。煙草を止めてからは他人に声をかける切っ掛けを失ったことは事実である。

836. クレテックの芳香

インドネシアの玄関口であるスカルノ・ハッタ国際空港(→851)に到着した際に鼻につく匂いがある。空気の汚れの中に花の匂いかとも思う南国の香りがあるが、その正体は「クレテック(kretek)」という煙草の香りである。

クレテックは煙草に丁字(→056)を刻んで入れたものである。丁字は黒いので煙草の色が濃くなる。クレテックとの対比で普通の煙草は「白煙草」といわれる。

煙草に火をつけると丁字も焦げて音がする。日本語では「パチパチ」というところであるが、インドネシア語の擬音では「クレテックレテック」と火のついた丁字が跳ねる。



「インドネシア初心者はインドネシアで二度火傷をする」という。一度はチャベ(→762)を口に入れた時に口内の火傷である。もう一度はクレテックで衣服を焦がす。最近では改良されて昔ほど火は飛ばなくなったが油断はできない。

クレテックの最大の特徴は香りである。誰かがクレテックを吸うと部屋中に漂う丁字の甘い香りは、いわばインドネシアの香りである。人が煙草を吸うだけで周りに芳香が漂う。東京都心の某ビルのエレベーター開閉の際にクレテックの香りがしたので一階の案内板で確認するとそのフロアはインドネシアの会社の入居を見て納得をした。

クレテックという丁字入の煙草はインドネシアの発明である。そもそも丁子は航海時代を誘導したインドネシア特産の香料であり、もっぱらヨーロッパに向けの輸出品であった。しかし今日では丁子

の世界最大の需要先はインドネシアのクレテックである。

インドネシアで煙草といえばクレテックのことであり、クレテックを製造しており、最大のブランドはグダン・ガラムである。インドネシアの煙草の売上の9割はクレテックであり、アメリカの煙草会社の広告も効き目もない。

むしろインドネシアの煙草会社がクレテックでもって海外に進出を企て、既に東南アジアに進出しており、ブラジルも有望らしい。日本でもサーファーがお土産に買って帰ったことから若者の間で広がり、インドネシア特産品の販売店で売られている。

丁子はクレテックの原価の3割といわれる。その丁子の供給は国内生産の8万tでは不足のためアフリカなどからの輸入で賄われる。80年代の末に豊作で丁子の価格が下がった。このため煙草会社に対し丁子買い付け価格の引き上げ運動が起こり、政治的後ろ盾にスハルトの三男のトミー(→452)を担ぎ出した。

トミーは丁子供給の流通機構の近代化という口実で丁子買い付けの機関を作り、独占を図ろうと策動したが、煙草業界は団結して丁子の混入量の引き下げと在庫減らしで対抗した。このためトミーの新機構は大量の在庫をかかえ経営に行き詰まった。

両者の攻防戦に捲きこまれとぼつちりをくったのは丁子を生産している東インドネシアに多い小農家である。新機構はファミリービジネスの横暴として内外から非難された。1998年5月にIMFとの合意により丁子の流通は自由化された。

⇒527.グダン・ガラム社

837. トゥアック/ヤシ酒

外島の非ムスリム地区やあるいはジャワ農村でもヤシ(→044)の樹液を発酵させた「トゥアック(tuak)」というヤシ酒がある。イスラム教ではアルコールは禁じられているため基本的には自家用であり商品になりにくい。トゥアックを飲ませるワルン(→858)もある。

ヤシ酒のためにはヤシの木に上り、実がなるべき芽を切りその先を瓶に差し込んでおく。一晩で200~400ccの白い液がたまる。その液は数時間で発酵してアルコール飲料になる。アルコールの濃度はビールの

半分程度である。時間をおくと発酵が進みすぎ酸っぱくなる。ヤシ酒を蒸留すると「アラック(arak)」という強い酒になる。

液の採取で留意すべきことは毎日、同じ受け瓶を使用することである。瓶の底に少しでも液を残しておけば酵母菌も残るので新しい樹液でアルコールが再生産される。雨が混入しないように覆いが必要である。毎朝、液を採取する際に切断面の乾燥を防ぐため芽の部分を薄く切り落とす。この作業は夕方にも必要である。

朝晩の木登りさえ厭わなければ毎日アルコール飲料が飲める。ヤシの実をひねって落とす作業は猿を仕込めば可能であるが、ヤシ酒の製造という高度の技術は猿任せにはできない。このため木登りの梯子をかけたり、木の幹に階段状の切り目がいれてある。

花の芽を犠牲にすることはやがて成熟すべき果実を犠牲にして得られる酒である。雨季は生産量が多いが乾季は採取を休める。

ビールの現地生産も輸入も難しかった VOC 時代にビールの代わりにヤシ酒をたらふく飲んで亡くなったと墓碑銘に記してもらったオランダ人もいる。

カリマンタン島のマレーシア側のサラワク州にある LNG 基地出張の延長でイバン族(→624)のロングハウス(→941)の村を訪れ、杯にライス・ワインと称する何か得体のしれない白く濁った液を奨められた。これも仕事のうちと意を決して飲み干すと数十年前に飲んだ“どぶろく”を思い出した。

英語の解説書にはイバン族のトゥアックは米から作るライス・ワインと記してあるが、日本語では“どぶろく”である。記してあるライス・ワインの製造法はどぶろくと同じである。盆踊りのような踊りをしながらトゥアックを回し飲みし、酔いつぶすまで飲ませる様は日本の酒盛りと同じである。

バリ島、ロンボク島には「ブレム(brem)」というもち米から造る甘い酒があり、祭りの日に飲む。イスラム教改宗以前、ブレムはジャワでも製造されていたらしい。

イスラム教徒は飲酒を禁止されているが、インドネシアでは宗教の自由も認められているのでアルコールの販売が禁止されているわけではないが、輸入酒の税金は高い。

インドネシア製のビールに【ビントアン(BINGTANG)】がある。ビントアンの意味は「星」である。緑色のビンの色がハイネッケンと同じであるのは、植民地時代にオランダのハイネッケン工場をインドネシア独立後接收したことに由来する。